ぐるっと東北

母校をたずねる

新聞部で社会への視点培う

県医師会会長　小原紀彰さん＝1960年度卒

岩手高 4

小原紀彰さん(75)＝1960年度卒＝は県医師会長として、少子・高齢化などと向き合い、地域医療の向上に努めています。また、花巻市に同市初の透析治療ができる病院を開業し、患者を支えています。岩手高時代を「高校時代の新聞部での経験が社会に目を向けるようになった原点」と振り返ります。【鹿糠亜裕美】

父は町医者でした。自然と医師を目指すようになり、勉強をするため岩手中に入学し、岩手高に進学しました。

高校時代、先生方から強制をされた記憶はありません。「君たちは自分の目標があるのだから、それに向かって頑張れ」ということだったと思います。同級生の多くが家業を継いでおり、皆それぞれ目的があって学んでいました。

部活は「石桜新聞」を書く新聞部に入っていました。いろいろな新聞を読み、世の中の動きを勉強して記事を書くことで、社会勉強になりました。新聞に広告を掲載しますが、映画館からチケットがもらえました。それで好きな洋画を見ていました。

生徒会長だったんですよ。当時、髪形は「坊主(丸刈り)」と決まっていましたが、「坊主は嫌だ」という声を受け、頭髪の自由を訴える論説を書いたこともありました。このような記事で名前が売れ、生徒会長に推してもらえたのかもしれません。

生徒会長の時、仲間にうんと怒られたことがあります。クラブ活動の予算は、体育系が手厚くて、文化系は少なかった。平等にしようと、少しだけ体育系を少なくしたところ、当時強かったラグビー部の仲間に「なんだ―！」と怒られました。

高校卒業後、1年間浪人をして岩手医科大に入学し、泌尿器科の医師になりました。透析治療をする盛岡市内の病院に勤務していたところ、透析ができる病院がない花巻市内からもたくさんの患者さんが通院していました。1日おきに盛岡に通うのはとても大変なことです。患者さんからの強い要望もあり、花巻で開業をしました。

県医師会長としては「医師免許を持った会員を守ること」と「患者さんの命を助け、市民の皆さんの健康を守ること」が仕事です。医師会として少子化や高齢化などの対策にも力を入れています。

透析患者を助けること、そして医師会としての取り組み――。その仕事の原点には新聞部があります。新聞を読み、社会情勢に目を向ける――新聞部時代に培った視点が生きていると感じます。

私には医師になるという目標がありましたが、高校時代に自分の目標を見つけるのは難しいかもしれません。しかし、手本は身近にあると思います。世の中の仕組みなどに疑問を持ち、その本質を見つけられるようになれば、おのずと目標が見つかるでしょう。とにかくいろいろなことに興味を持って、高校生活を送ってほしいですね。

おばら・のりあき　1943年北上市和賀町生まれ。岩手医科大卒。同大付属病院泌尿器科や盛岡市の三愛病院などに勤務した後、78年12月、花巻市に小原クリニックを開業。同市で初めて人工透析を行う。98年から県医師会常任理事を務め、2010年副会長、18年6月会長に就任。13年日本医師会優功賞、17年花巻市市勢功労者表彰を受賞。

村上昭夫も卒業生

「啄木、賢治に続く詩人」

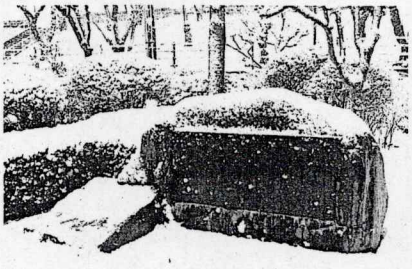
「石川啄木、宮沢賢治に続く詩人」と呼ばれた岩手出身の詩人、村上昭夫(1927～68年)は、旧制岩手中学校（現岩手高）の卒業生だ。

村上は岩手中卒業後、45年に旧満州（現中国東北部）浜江省官吏として大陸に渡り、現地で臨時召集兵になった。その後、シベリアの収容所へ送られる途中、列車から飛び降りて脱走したともいわれる。

帰国後、23歳で結核を患い、療養を続けながら詩作に取り組んだ。67年に生涯唯一の詩集「動物哀歌」を発表。翌年、詩壇の芥川賞といわれる「H氏賞」を受賞し、生と死を凝視し、祈りや怒りを歌った透明感のある詩作が評価された。

村上は41歳の若さで亡くなるが、石桜50年史によると、死に直面し「先生、石桜精神で頑張っています」と山中順三校長に告白したという。盛岡市立図書館構内に75年、詩碑が建てられた。【滝沢修】

（毎週金曜日に掲載）



盛岡市立図書館の構内に建つ村上昭夫の詩碑＝盛岡市高松1で

卒業生「私の思い出」募集

岩手高卒業生のみなさんの「私の思い出」を募集します。300字程度で学校生活や恩師、友人との思い出、またその後の人生に与えた影響などをお書きください。卒業年度、氏名、生年月日、職業、電話番号、あればメールアドレスを明記のうえ、〒100―8051、毎日新聞地方部「母校」係（住所不要）へ。メールの場合は shuto@mainichi.co.jp へ。いただいた「思い出」は紙面や、毎日新聞ニュースサイトで紹介することがあります。